

日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03 (3209) 1861 FAX 03 (3232) 0557

<https://www.niccho.com/> email: jimu@niccho.com

—50 周年の節目を迎え、新たな「日彫会」の創造を目指して—



日本彫刻会 50 周年記念事業特別展 開会式

第50回記念日本彫刻会展覧会記念事業を終えて

日本彫刻会理事長 神戸峰男



日本彫刻会は、昭和45年社団法人日本彫塑会として出発をして以来、昨年50年の節目の年を迎えました。本来ならば、記念公募展をはじめ盛大に開催されるはずの記念事業でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、延期を余儀なくされ、一年後を目途にコロナ禍での活動を模索しながら準備を進めることとなりました。

一年を待つて開催された第50回記念日本彫刻会展覧会は、会期半ばに緊急事態宣言が発出されるなど喫緊の対応を要する場面もありましたが、会員の皆様のご尽力、外部審査員としてご参加いただきました澄川喜一先生、武田厚先生をはじめ、関係各位のご支援、ご協力のおかげをもちまして、成功裡に終えることができました。また、これに続く東海日彫会、北陸日彫会による地方巡回展においても、様々な企画が工夫されて、記念展にふさわしい充実した展覧会となりました。

更に、若手作家の澆渌とした作品が新鮮であった「新鋭選抜・受賞作家展」（銀座・ギャラリー青羅）、選抜会員による見ごたえのある作品群が会場を飾った「日本彫刻会選抜展」（日本橋・三越本店）も、一年越しの思いの詰まった作家の息遣いが聴こえる展覧会となりました。

そして、記念事業の中心に位置付けておりました、特別展「日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜―戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち―」展は、オープニングに元文化庁長官宮田亮平先生、日仏会館理事長中島厚志様をはじめ、大勢の御来賓にご臨席を賜り開会の運びとなりました。

彫刻に込めた先達の強く、また特別な思いを振り返り、新たな「日彫会」を創造し持続可能な公益社団法人として、再出発していく契機となる展覧会と企画したものではありませんが、実際に会場に作品が展示されますと、想像していた以上の感動を皆様にお届けできたのではないかと考えています。写真家の山崎兼慈氏、そして我々の想いを装訂に具象化していただけたコーホー株式会社様には一方ならぬご尽力をいただき、立派な作品集もできました。作品をご提供、ご協力をいただいたご遺族、美術館をはじめとする関係各位の皆様、本展覧会に論文を寄せていただいた黒川弘毅先生には、この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

「50周年記念誌」もまもなく発行の運びとなります。これをもって記念事業の一切を終えることとなり、完成が待ち望まれるところです。理事長の職務を3期6年努めさせていただきましたが、来期は新たな理事長にバトンをつなぎ、また別のお役目のもとに新たな展開を見据えた新しい日彫会の構築に引き続き取り組んで参りたいと存じます。会員の皆様をはじめ、関係各位のご協力ご支援を賜りますことを切にお願い申し上げます。

2021年度 日本彫刻会総会

第92回通常総会報告

2021年1月16日（土）午後3時から日展会館において第92回通常総会が開催されました。

出席者 正会員 183名（内委任状175名）

定款17条の定めるところにより総会成立

議事

第1号議案 2020年度 事業報告承認の件
第2号議案 2020年度 決算報告承認の件・

監査報告

第3号議案 第50回記念日本彫刻会展覧会開催に関する件

第4号議案 会員状況承認の件

第5号議案 その他の件

全議案とも異議なく承認されました。

報告

1 2021年度 事業計画の報告

2 2021年度 予算の報告

3 新運営委員および新無審査会員の報告

4 第50回記念日彫展審査員の報告

5 第50回記念日彫展会友推挙選考委員の報告

6 50周年記念日本彫刻会新鋭選抜（三越展）及び

第13回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家展準備状況の報告

7 50周年記念事業の経緯と準備状況報告

8 事務処理規則変更の報告

9 その他の報告

高齢者会員祝賀

◇ 展覧会中止や延期の経緯の報告

本年度、日本彫刻会で予定されていた展覧会の各種企画変更の経緯、及び新型コロナウイルス対策の実施につきまして会員の皆様にご報告いたします。

◎「第50回記念日彫展」

（4月18日～5月2日 東京都美術館）

東京都美術館の感染防止対策に基づき展覧会を開催いたしました。ギャラリーCにおいて例年通り開会式、続いて表彰式を同会場に行いました。感染防止のためオープニングパーティ、ギャラリートーク、研究会は中止としました。作品陳列におきましては、感染予防として一方通行で展示会場を回れるようにとの東京都美術館からの要請もあり、各作品のスペースをできるだけとりつつ、密にならぬよう鑑賞スペースを設けて、ギャラリーAからギャラリーCまでを一方通行で巡回できるように配慮しました。

U-20につきましては、昨年度展示できなかった第2回展の作品と第3回展の作品を合同で展示いたしました。

4月18日に開会した第50回記念日彫展でしたが、会期中の4月25日に「緊急事態宣言」が出されたことにより、東京都美術館が閉館となり24日で開催が打ち切りとなりました。急遽会員の皆様に開催途中での打ち切りを連絡させていただきました。美術館との協議により搬出まで会場の陳列はそのままに、搬出に向けて谷中田美術に作品移動を依頼し混乱の無いよう、予定されていた期日に搬出を行うこととしました。

◎「日本彫刻会選抜展」

（6月1日～6月7日 日本橋三越本店）

三越の厚意により会期を一日増やし開催開始を6月1日からとしました。ギャラリートークを初めとする開催中の行事につきましては、すべて中止といたしました。

◎「第13回日本彫刻会新鋭選抜・受賞作家展」

（5月23日～6月5日 ギャラリー青羅）

ギャラリー青羅の厚意により会場費はそのままに2週間の会期を用意していただき展覧会を開催いたしました。

◎「特別展 日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜」

「戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち」

（6月26日～7月9日 日仏会館）

日仏会館からの感染対策の依頼にそって開催の手筈を整えました。開催行事につきましては、開催当日の武蔵野美術大学黒川教授、青山敏子様の講演会は、映像収録後、ネット配信することと致しました。（内容は18～20頁）

◎50周年記念誌

「日本彫刻会史Ⅱ（2001～2021）」

今年度の企画におきましても新型コロナウイルスの影響は避けられないこととなりましたが、知恵を借りつつ対応させていただきました。会員の皆様におかれましてもご協力ありがとうございました。新型コロナウイルスの一刻も早い収束を祈って、以上ご報告させていただきます。

（会務委員会・企画）

第50回記念日本彫刻会展覧会

①会期 2021年4月18日(土)～4月24日(土)

※5月2日(日)までを予定していたが、政府より緊急事態宣言が発令されたため、4月25日(日)以降は中止となった。

②会場 東京都美術館 ギャラリーA・B・C

(東京都台東区上野公園8-36)

③陳列点数 271点

〈内訳〉

正会員 199点

会友 17点

遺作 4点

無鑑査(一般応募) 2点

鑑査(一般応募) 36点

U-20(第2回一般応募) 6点

U-20(第3回一般応募) 7点

※2020年に陳列できなかった第2回U-20作品も、本年度まとめて陳列した

④審査員

特別賞審査員

澄川喜一氏 武田厚氏 日本彫刻会理事

審査員長 神戸 峰男

川崎 普照 山田 朝彦 磯尾 隆司

宇津 孝志 小野 啓亘 川崎 義昭

川田 良樹 寒河江 淳二 田中 厚好

吉居 寛子 岡本 和弘 森田 一成

安田 陽子 (以上14名)

⑤会友推挙選考委員

寒河江 淳二 小野 啓亘

田中 厚好

川崎 義昭 (以上4名)

⑥受賞者

西望賞

文部科学大臣賞

東京都知事賞

第50回記念特別賞

日彫賞 浮森 夕菜

優秀賞 加藤 真浩

山田 雅英

新人賞 加藤 史郎

濱田 真菜

U-20日彫賞

青木 謙征

源 果子

U-20優秀賞

青木 秀征

⑦会友推挙・正会員推挙

会友推挙

加藤 史郎

鈴木 伽奈

正会員推挙

芦田 風馬

切原 勇人

細川 忠夫

廣川 政和

鈴木 紹陶武

井上 周一郎

梶川 俊一郎

奥平 陽和

志村 広子

芦田 風馬

田中 優作

本多 史弥

青木 雄生

青木 謙征

源 果子

青木 秀征

迫 朝澄

紀平 佳代

橋本 和成

小寺 美樹

町野 紗恭

川合 健介

田中 宏典

丸田 多賀美

前田 桂子

伊藤 奏太

小山 信一

川崎 義昭

濱田 天宝

(以上25名)



ギャラリーCの展示風景



ギャラリーCの展示風景

⑧入場者数 2,574名(前回12,722名)

(内訳)

一般 94名

東京都美術館特別展半券 140名

招待状 1,593名

出品者 529名

障がい者手帳をお持ちの方 58名

付添者 21名

日本美術家連盟他 17名

65歳以上、大学生以下 122名

パスポート 0名

⑨作品批評会

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。

⑩彫刻鑑賞解説会(ギャラリートーク)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。

⑪彫刻に触れる鑑賞支援活動

a、視覚に障がいがある方のタッチツアー

希望者の申し込みにより実施しました。

参加者 2名(うち付添1名)

b、盲学校鑑賞教室

4月23日(金) 筑波大学附属視覚特別支援学校
(高校生17名、教員6名)

⑫開会式ならびに表彰式

日時 2021年4月18日(日) 午前10時半より
会場 東京都美術館ギャラリーC

⑬オープニングパーティ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。



ギャラリー B の展示風景



ギャラリー A の展示風景

慶事

日本芸術院会員就任

山田 朝彦 先生

(令和 2 年 12 月)

・改組新第7回日展(令和 2 年度)

内閣総理大臣賞

「曙」

楠元 香代子 先生

・改組新第7回日展(令和 2 年度)

東京都知事賞

「私は飛びたい」 谷口 淳一 先生

・改組新第7回日展(令和 2 年度)

日展会員賞

「やすらぎ」

櫻井 真理 先生

◇日彫展開会式・表彰式



開会式の様子

展覧会初日、10時30分より東京都美術館ギャラリーCにおいて、山田朝彦委員長の司会で開会式が行われました。ご来賓として、前文化庁長官の宮田亮平先生、文部科学副大臣の丹羽秀樹先生の秘書の杉山様、光風会の理事長の藤森兼明先生がご参列ください、理事の先生方、多くの出品者、来場者が集まりました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、入館時の検温、手指の消毒、人と人の間隔を空けるなどの措置が講じられた中ではありますが、50周年にふさわしい盛大な開会式となりました。



テープカット

はじめに、神戸峰男理事長より挨拶がありました。昨年新型コロナウイルスの影響で50周年の日彫展が一年延期になったこと、会員一同が心を合わせたことで今年開催にたどり着けたこと、展示総数を見ると本会が彫刻だけの公募展としては世界に誇れる規模であること、そして、これは日本の彫刻界を築き保ってきた諸先輩のご努力と日彫会への愛情なくしてはありえないことが語られました。また、このように展覧会を開催できることは、多くの方に見ていただけるだけでなく、作家同士が磨き合える場となっており、彫刻観も表現も多様化する現代において、次代の日彫会を形づくっていることにも触れました。そして、ご臨席の方々への謝意と、日本彫刻会の発展と会員諸兄の更なる活躍を祈念し、挨拶が締めくくられました。

その後、宮田亮平先生より祝辞がありました。50回と言う歴史の節目を迎え、世界に誇る具象彫刻の展覧会へと発展した本会についてお祝いの言葉を頂戴しました。また、祝辞の中で、本会所属の芸術院の先生方が若い次の世代に、彫刻のすばらしさを伝えていくことにも触れられ、日彫会の存在意義についても語られたことが印象的でした。

最後に、ご来賓の宮田亮平先生、杉山様、神戸峰男理事長によるテープカットが執り行われました。テープが切られると同時に、会場から大きな拍手が起こり、華々しく第50回日彫展が開幕しました。

引き続き同会場にて、表彰式が行われました。昨年度開催された「第2回U-20日彫展」は、新型コロナウイルスの影響で表彰式ができなかったため、今年は「第2回および第3回U-20日彫展」「第50回日彫展」の各受賞者への授与が行われました。



授賞式

◇受賞者の声

〈西望賞〉 「時和む」

廣川 政和

「人」と「時」。これが私の彫刻の主題となっています。これまで私に関わってくださった方々のこと、頂いた言葉、忘れられない出来事、思い出される風景など、これらが制作に向かう私の心を支えてくれていきます。主題にふさわしい「形」に少しでも近づいていけるよう精進したいと思っています。



〈文部科学大臣賞〉

「塔の上のシンガプーラ」

鈴木 紹陶武

シンガプーラは、1970年

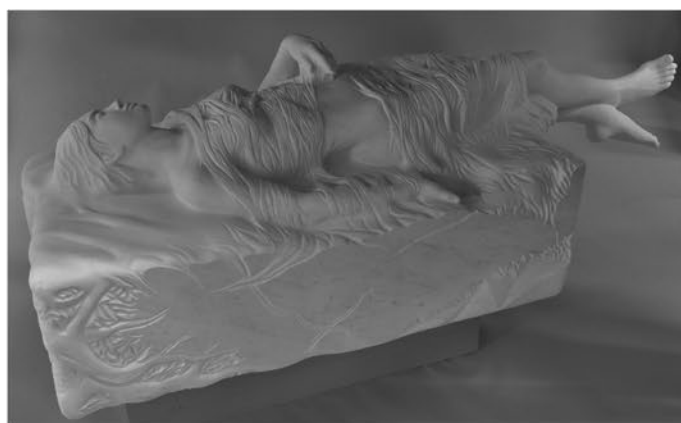
代初めにシンガポールで発見された猫で、小さな妖精と呼ばれている。ケージの上から見下ろす猫を見上げて観察する自分を2匹の猫で表現し、ケージをギリシアの神殿や鐘楼に見立て、今は行けない海外旅行に想いを馳せて構成した。檻に閉じ込めるのではなく、大きく飛び出す日を夢見て制作した。



〈東京都知事賞〉

「春水」 井上 周一郎

北欧神話に登場する宇宙樹。その大樹は、世界が一変し、炎に焼かれても大地の奥深くに張った根から水を吸い上げ、わずかな枝に緑の葉を茂らせた。生き残った人間は、その根に隠れ、葉からの滴で生きながらえ繁栄に向かった。この神話を読んだ時、現代に通じるものを感じ、着想を得た。本作では、生命を潤す春を求める様を表現した。



〈第50回記念特別賞〉「再会」

齋藤 尤鶴

知り合い同志が会った時は、やあ！とか、よっ！等親しみをこめて挨拶をする。その瞬間を彫刻にして見ました。明るい表情の中に強さを感じる事に気がします。



〈第50回記念特別賞〉「漂泊」 梶川 俊一郎

はじまりのイメージは「寄る辺なき」という言葉から、次に生を求めて大地を彷徨う人、最後に暑い風をはらみ波を打つ自由をあらわすぼろ布。取り留めなくぼつぽつと浮かびあがるその断片を作品にこしらえます。出来るだけ早く、作品が消えないように。



〈日彫賞〉

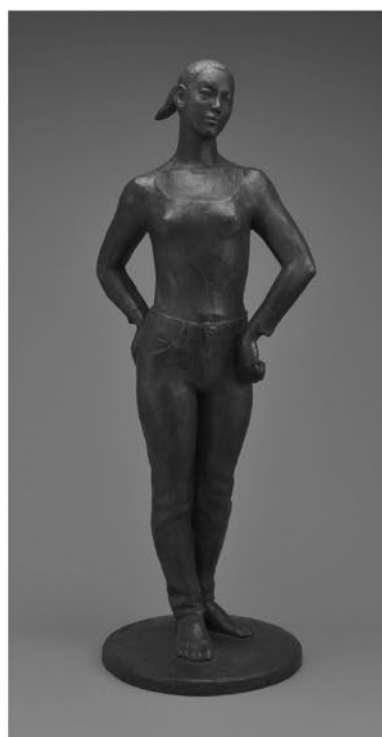
「夢の記憶」 浮森 夕菜

この度はこのような賞を頂戴する運びとなり大変有難く、また身の引き締まる思いです。今回の出品作は、現実のモデルの姿と自分の感じる量の美しさの調和を探しながら制作しました。未消化な部分も多々ありますが、この度の受賞を糧に、今後の制作の中で解決できるよう努めていきたいと思います。



「爽」 菊川 敏

制作にあたっては捻じれの動きを意識してポーズを考えました。自分でポーズをとったりしてエスキースを制作し、その段階で体の各パーツを動かしてイメージをまとめていきました。本制作ではモデルも使いましたが、エスキースの段階から大きな所は変えずに一気に作品を仕上げました。



「春愁」 奥平 陽和

座りポーズは、胴体や手足の向き・形が、立ちポーズよりも複雑になり、制作の際は多くの試行錯誤を重ねました。一貫して力の緩急を意識し、力強いところ、脱力するところ、そのバランスがタイトルのように、春の持つ明るい強さと、同時に起こる儚さの対比した様子として、作品に反映されていればと思います。



〈優秀賞〉

「#24」 加藤 真浩

アメリカのバスケットボール選手を制作しました。プレイ中の躍動感あふれる姿をイメージしながらも、彼の内面も表現することを目指しました。絶えず成長し続けること、常に最善を尽くすこと。

そんな彼の人生から学んだことを胸に抱きながら、彫刻家として歩んでいきたいと思っています。



「舞」 山田 雅英

書道の平面表現から浮かび上がる立体表現への進化に着目。漢字一つで表せる意味に限りがあるが立体化する事で表現が何十倍にも。題名である舞から連想される立ち回り、生命力、喜怒哀楽など様々な感情を人、骨、動物、布、岩肌などで表現し立体的な水墨画として完成しました。木と墨の組合せによる匂いを感じて頂けましたら幸いです。



「波音」 志村 広子

このところ不安定な状況や病が渦巻く中、いつも変わらず自分の中に在るもの。それはまるで波音のように時には優しく心地よく、時には荒々しく聞こえてくる。

その存在に耳を傾けて、自分の内から湧き上がる感情を大事に、今を生きていこうと願い、覚悟している姿を表現したく制作しました。



「息吹」 芦田 風馬

力強く立つ若い男性像を制作しました。今後未来へ進んでいく中に不安な心を持ちつつも前向きに立ち向かっていくという強い意志を自分自身に重ねながら表現しようと心がけました。作品が完成に向かうにつれ春の日差しと共に暖かくなっていく気候と生命の活力を感じたことから「息吹」という作品名としました。



「釣瓶落とし」 武本 大志

「釣瓶落とし」は木の上から落ちてきて通行人を踏み潰す巨大な生首の妖怪です。本作品は金剛力士像の卍行をモデルにし、落ちた衝撃で目の焦点がズレた姿を歌舞伎の「睨み（にらみ）」を参考に表現しました。材質は、古来から仏像制作に用いられる乾漆技法によるもので、漆と砥の粉を練り合わせた「錆漆（さびうるし）」でできています。表面の光沢は漆によるものです。



〈新人賞〉

「夕涼」 田中 優作（新入選）

マスクで息詰まる日々の中で、ふと、人の面持ちを見る機会が減ったことに気づいた。そのせいか不思議と作品の表情もぼやけているように感じる。私はいつか世界を取り巻くウイルスの悲しみから解放され、何にも囚われない、夜風を心地良いと思える日を願うこの作品を作り、『夕涼』と命名した。



「17歳」 加藤 史郎

等身以上でないと受賞できないと思っていたので、受賞は大変うれしい。木造は体力勝負なので作れるうちにとの焦りがあります。長柄の突鑿で勢いで彫っているが、女性らしく滑らかにとの思いもあり、やればやるほど鮮度が落ちてしまう気がします。「もう一度見たい」と思ってもらえる作品を作りたい。



「咲く」 本多 史弥（新入選）

新人賞をいただいた作品は、筑波大学の大学院で、モデルを参考に制作しました。制作において心掛けていることは、空間の見せ方や量の繋がり方などに対して自分の目指す彫刻感を模索していくことです。まだまだ勉強中ではありますが、人体を表現することの難しさに対峙し、自分の彫刻表現を追求していきたいと思っています。



「風のうた」 橋本 和成

女性の姿の中に、空や、未来や、自由を想ってもらえたらいいなと思います。形が無い様でそこにあり、刻々と変わりゆくものを具象化したかったです。ありがとうございました。



「芽吹く」 濱田 真菜（新入選）

厳しい冬の寒さが終わり、だんだんと暖かくなってくるころ、木々の新芽が芽吹き、蕾が膨らみはじめます。ゆっくりでありながら力強い自然の姿と、6年間の大学生活を終えて新たな生活をはじめた自身の心のうちを重ね、表現しました。溜め込んだ力をぐっと放ち、また次の成長へとむかえるように、努力を重ねていきたいです。



〈新入選〉

「喜びの声」

「飾り帽子の少女」 植松 昭二



「おばあちゃん」 上床 恵

この度は、日本彫刻会展覧会において入選をいただきましたこと、喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。制作時、またかねてより多くの方々に支えていただき、ご指導いただけたおかげです。「おばあちゃん」は私の祖母がモデルです。「優しく」「温かく」、またふとした瞬間の「強さ」を表現したいと思いながら制作しました。



「go forward」 菊井 和史

彫刻を学ぶ機会に恵まれ、できない事の多さに腹を立てながらも、ふとした瞬間の喜びを味わいたくて制作してきました。初めての出品ですので、彫刻をやってみようと思った気持ちを像にしようと思いましたが、急がば回れで、少しずつ自分が思う像が創れるようになる事を願っています。



「2020」 佐藤 美唯



「陽光に向かって」 切原 勇人

このたびは、新入選させていただきありがとうございます。これまで彫刻を続けてきて、今回が初出品でありました。また、会員に御推挙いただき、感謝と同時に、もともとと精進しなければ、という思いを強く感じました。今回の入選を機に、気持ち新たに制作に取り組んでいこうと思います。



「くたびれた21歳」 服部 亜美



「オリンピアン」 中西 香織



「待つ」 羽室 陽森



「和」 高橋 弘夫

第50回記念日彫展に入選し喜びに堪えません。ご指導いただいた先生方に感謝申し上げます。人物表現は奥深く、魂が伴わないと豊かな表情は生まれません。作っては壊しを繰り返し、何とか創り上げました。友人に「お前の顔に似ている」と言われましたが、ほっと一安心。創作した「顔」を見つめていると愛しささえも感じます。



「繊細な美」 中田 成美

今回の日彫展に参加する機会をいただき誠にありがとうございます。私の作品を多くの人に見て頂くことができ大変嬉しく思っております。この作品は卒業制作で作ったもので、女性の美しさの儚さに立ち向かうという思いを込めて制作しました。



「面影」 丸田 多賀美



「あきらめない」 松浦 幸

新しい夢ができた。こんな素晴らしい彫刻界をもっともつと盛り上げられたらという夢だ。多くの資金と多くのアトリエが必要だろう。薄給会社員の私にはやはり無理か。彼女は東京都美術館から戻り私の部屋にいる。

「あら、おじさんの夢つても悪くないじゃない」なんて顔をした。彼女つまり初入選作品は、題名『あきらめない』。



「れいわのあゆみ」 松山 学

昨年8月4日61才で永眠した兄の遺作で、余命宣告から亡くなる直前まで力の入らぬ手で石膏をいじり、仕上げました。兄は大学時代に彫刻に魅せられてから、生涯、創作活動に没頭しました。兄の彫刻への愛、創作へ懸ける情熱には驚かされるばかりでした。このような記念すべき回に兄の作品が認められ、感謝します。



「裸婦―春」 村田 精一



「あこがれの一步」 水沼 博之

日彫会50回の展覧会に出品でき、入選できたこと、喜びでいっぱいです。制作は思うようにできず、自分への苛立ちと完成できるのかと不安の連続でした。冬の夜のアトリエからの帰り道、疲れ切った頭で悩みながら歩いたことも思いだされます。この入選をあこがれへ近づく一歩として、これから作り続けます。



「新風吹く」 門馬 宏子

今、改めて作品に対峙すると、反省点ばかりが目につき、新入選の喜びも、恥ずかしさに変わってしまっています。四半世紀ぶりの粘土の感触に、三年前からわくわくが止まらない自分に、自身が驚きつつ、次はもっと充実した作品を……と、気持ち新たに思っております。最後に審査員の方々と、ご指導頂いた先生に感謝申し上げます。



「和み」 村田 由美



「はつなつー風ー」 横田 昌明

会の節目の年に新入選をいただけた喜びとともに、ごまかしのきかない厳しい道に踏み入った緊張感を覚えます。一発花火に終わらないよう、道の先を見据えて研鑽と努力を続けたいと思っています。六十を過ぎてまだまだ、僕は後ろから誰かに尻を押してもらいながら木登りを続けているような気がするので。



「猿田彦大神」 和田 元子

日彫展に入選出来たことを心から嬉しく思っております。古事記の世界に興味を持つようになり、導かれるように猿田彦大神を作りました。師から自分の好きなものをただ作ればいいと、自由に制作させてもらったことに感謝しています。畏敬の念を抱きながらこれからも古事記の世界を表現していけたらと思っています。



◆第3回U-20日彫展

「集まれ！未来の彫刻家」

一昨年から始まった「U-20日彫展」集まれ！未来の彫刻家」が、本年で第3回展を迎えました。新しい感性を有する20歳以下の出品者の参加により、彫刻の魅力を幅広く紹介し、併せて次世代の彫刻家の育成を目指した取り組みです。

出品者はインターネットによる無料の出品手続きを行い、作品画像の審査を経て入選が決まり、特に優秀な作品は、さらに実物による審査が行われ、受賞作品が選ばれます。

今年は、人体等身に匹敵するサイズの作品や、緻密に彫り込まれた木彫作品など、本会会員が驚くような出品作が目立ちました。特に、過去の受賞者が出品する作品からは、瑞々しい表現力の良さを保ちながら、さらにレベルが上がった表現に挑戦する意気込みが見られ、今後が楽しみに感じられます。

昨年の第2回U-20日彫展は、入選者や受賞者は決定したものの、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示が中止となりました。そこで、今年の第50回日彫展及び地方巡回展の会場内では、第2回展および第3回展の入選作品の写真がパネル展示され、受賞作品においては実物が陳列されました。



表彰式



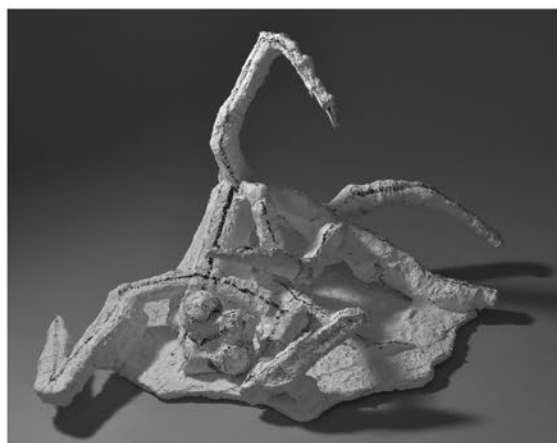
U-20日彫展の作品展示の様子

第3回展 入選者

大場友麻	柿田紗蘭	濱田天寶
横地拓海	服部優美	北林明香里
後藤青空真	中村莉里杏	岡井弥玖
天野美月	源果子	加藤彩夏
石井葵	石掛由季乃	長谷川温香
綿引敦也	迫朝澄	青木秀征
青木雄生	青木謙征	青木ほのか
小松あゆ	中舍幸太郎	小嶋勇矢
横山ななほ		(以上25名)



U-20 日彫賞
加藤 彩夏



U-20 日彫賞
青木 雄生



U-20 日彫賞
青木 謙征



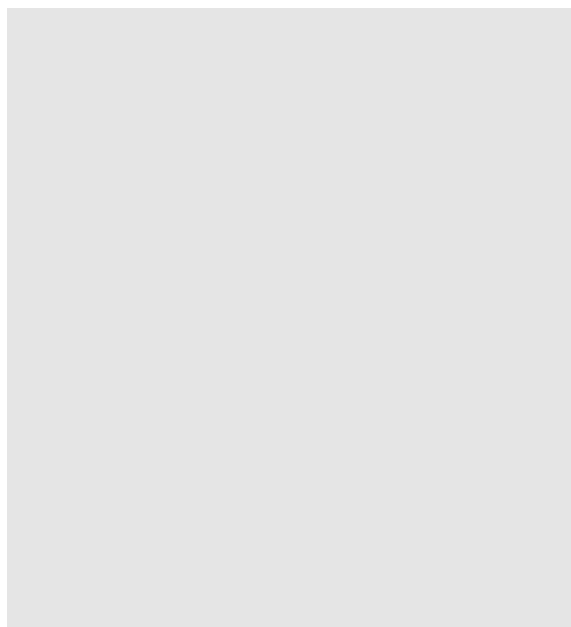
U-20 優秀賞
迫 朝澄



U-20 優秀賞
青木 秀征



U-20 日彫賞
源 果子



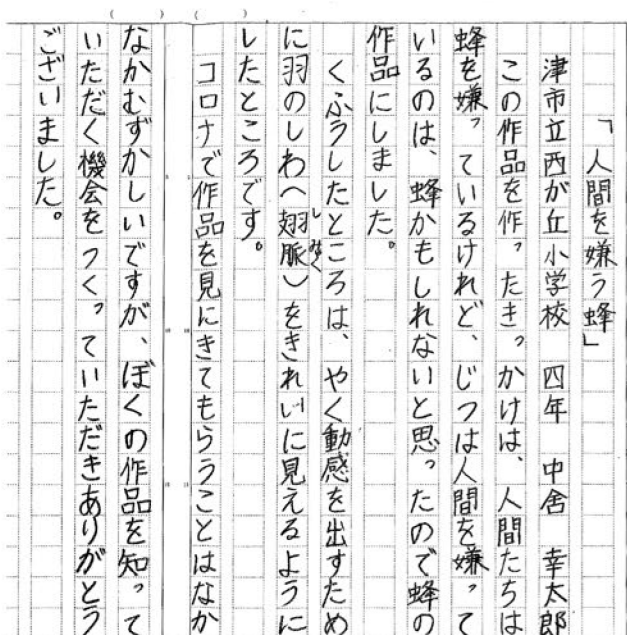
中日新聞 2021 年 6 月 30 日掲載。

U-20 日彫展は、新聞でも取り上げられるほど、注目されつつあります。左の写真は、今年、6 月 30 日付の中日新聞の記事です。受賞者が作品に込めた思いや、今後の抱負が語られています。紙面の都合上、一部ではありますが、取材を受けた方の作品紹介文を掲載します。彫刻を通して、今と向き合う姿が、生の言葉として伝わる文章だと感じます。

〈U-20 日彫展が新聞で報道〉



U-20 優秀賞
濱田 天寶



※上は、昨年受賞の中舎さんの作品で、
左がその作品に込めた思いです。

◇日彫友の会の活動

盲学校鑑賞教室

日彫会はこれまで公益社団法人の社会貢献の一つとして「触れる彫刻鑑賞」を通し、視覚障がい者への彫刻鑑賞の機会を提供・支援してきました。

今回の展覧会でも日彫友の会と鑑賞支援部が中心となり「盲学校鑑賞教室」と「タッチツアー」が行われる予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い内容や実施方法の変更を余儀なくされました。

鑑賞教室では、これまで実践してきた触れる鑑賞の形式を変えることなく、鑑賞の場を整えることを方針として、各会員の協力を得ながら「鑑賞者×彫刻家」による個別の空間をつくりあげていくことを目指しました。

コロナ禍での実施ということもあり今回参加希望を示したのは筑波大学附属視覚特別支援学校高等部の1校のみでしたが、対策を講じた準備を行いつつ、学校の担当教員と協議し、鑑賞教室の5日前に「実施」の判断をすることとなりました。

当日は学校側生徒14名、引率教員7名の計21名と日彫会会員14名、美術館ボランティアスタッフ3名の計17名、総計38名で開催されました。

例年通りの流れであれば、生徒たちはまず東京都美術館内のアートスタディールームで、導入として彫刻に関する簡単な講義を20分ほど聴いてから、展示ギャラリーに向かいます。生徒2〜3名に作家が1名（必要に応じて引率教員）付き、70分程度グループで鑑賞を行い、その後アートスタディールームでまとめを行います。



アートスタディールームでの講義の様子

しかし、今回は密を避けるために生徒14名を7名ずつの2グループに分け、アートスタディールームでの彫刻講義60分と展示ギャラリーでの彫刻鑑賞60分を入れ替え形式で実施しました。生徒たちはバスから降りたところで担当作家と会い、全体が一つの空間に集合することは一度もありませんでした。

手袋の使用に際しては、どのタイプが鑑賞において適しているかを検討しました。締め付けの感じや滑り具合など、比較的素手の感覚に近いという理由で今回はプラスチック手袋を準備することとなりました。形態の把握ではこれまでと大きな差異はなく、表層の質感や温度まで確認することができ、難しいと予想された素材感についても問題なく感じることができました。

鑑賞会後、学校で生徒たちが記したアンケートでは、コロナ禍で学外での学びの機会が一年以上なかったこともあり、触れる彫刻鑑賞が有意義であったという感想が寄せられました。鑑賞経験を持たない生徒たちが大半でしたが、美術館での鑑賞を楽しんでくれたようで、「また行きたい」「これから、彫刻と触れ合う時間を、どんどん増やしていきたい」という声が複数ありました。また、前向きな意味合いで「今度は手袋なしで触ってみたい」という意見があったことも印象深かったです。



手にとって作品を鑑賞する生徒達

視覚障がい者への彫刻鑑賞の支援として行われたこの企画ですが、これを担当する会員一人ひとりにとっても彫刻表現とは何か、素材と形だけでなく表現について改めて考える良い機会となったと思います。

第50回記念日彫東海展

会期 2021年6月9日（水）

～6月13日（日）

会場 愛知芸術文化センター8階

（名古屋市中区東桜一丁目13番2号）

陳列総数

136点（巡回作品67点 デッサン作品43点）

入場者数 1,344名

愛知県知事賞

「森の囁き」 工藤 潔

中日賞

「暇つぶし」 柴田 茜

東海テレビ賞

「思い」 堀 龍太郎

東海日彫会奨励賞

「慈光」 鈴木 伽奈

東海日彫会新人賞

「クンダリニー母ちゃん」 田上 万豊



授賞式の様子

今年度の日彫東海展は新型コロナウイルス流行に対する非常事態宣言下での開催となった為、祝賀会をはじめ「触れてみる彫刻鑑賞教室」は中止せざるを得ず毎年、鑑賞教室を楽しみにしていただいていたおりました参加者の方より惜しむ声をいただき大変心残りの展覧会となりました。

しかし、今回の展覧会は一昨年より始まりました「U-20日彫展」の作品が本年度の作品達に昨年度の入賞作品も加わり一層、会場が瑞々しい感性を楽しめる空間になりました。また、日頃「彫刻家の方はデッサンをかかれるの？」と問われる事があり、今回は50回記念展という事で東海展特別企画として東海日彫会会員によるデッサン展を併せて開催いたしました。入



デッサン展の様子

場者の方々にも大いに興味を持っていただき大変御好評をいただきました。

今後、日彫東海展では機会が有りましたらデッサンの展示も検討したいとの意見が出ておりました。

6月13日（日）午後13時より大村秀章愛知県知事が展覧会の視察に見え山本眞輔会長、神戸峰男理事長が会場をご案内いたしました。U-20の勢いの有る作品や日彫展の卓越した表現の作品、また企画展のデッサン作品など興味深く鑑賞され今後の会の発展と創作活動への激励をいただきました。



愛知県知事の視察の様子

先述しましたように非常事態宣言下での開催という事もあり、来場者数は1,344名と少なめではありましたが、しかしそのような状況でも来場いただけた事に大変感謝しております。来年度は新型コロナの感染終息を期待し、今回実施出来なかった「触れてみる鑑賞教室」などの開催に向けて県民や教育機関に広く呼び掛けていきたいと思っております。作品と作家と鑑賞者の交流に尽力し、会員相互のより良い研鑽の場となるように、彫刻を身近に感じていただける展覧会にしていきたいと思っております。

第50回日彫北陸展

会期 2021年6月16日(水)～6月20日(日)
会場 石川県立美術館(石川県金沢市出羽町2-1)
陳列点数 92点(内巡回作品67点)
入場者数 993名

北陸日彫会賞 「夏のひととき」 川田 良樹
北國新聞社社長賞 「MIO」 中口 一也

第50回日彫北陸展は会期前日の6月15日に搬入陳列を行いました。その後、神戸理事長、石川県代表、金沢美術工芸大学学長、石川県立美術館副館長、北國新聞社をはじめ各報道機関代表などの列席のもと開場式を執り行いました。開場式では北陸展の表彰式も行いました。



開場式の様子



開場式後のギャラリートークの様子

続いて石田陽介会員の司会進行で来賓も交えてギャラリートークを行いました。まず、理事長が自作について語られ、参加者は、制作に向かう姿勢や心構えを聞き感動しました。また、受賞者によるトークもあり参加者は有意義な時間を過ごしました。



北陸日彫会第50回記念特別企画発想展の様子

その後U-20日彫展の解説があり地元石川県からの出品者もいて熱心に説明を聞いておられました。北陸日彫会では北陸日彫会第50回記念特別企画発想展を同時開催し、彫刻が完成するまでのデッサンや小型を制作・展示しました。一般の鑑賞者は普段見ることが出来ない内容の展示だったと好評の様子でした。展覧会にはコロナ禍でありながら石川県民の愛好者や北陸の会員の知り合いがたくさん来場していただき例年とほぼ変わらない入場者数でありました。

◇50周年記念事業特別展

日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜

―戦後の具象彫刻を牽引した彫刻家たち―

会期 … 6月26日（土）～7月9日（金）

11時半～19時半（最終日は15時まで）

会場 … 日仏会館ギャラリー

（東京都渋谷区恵比寿3-9-25）

出品作家…朝倉文夫	北村西望	齋藤素巖
藤井浩祐	吉田三郎	加藤顕清
澤田政廣	雨宮治郎	清水多嘉示
古賀忠雄	松田尚之	圓鐔勝三
富永直樹	木下 繁	北村治禎
晝間 弘	進藤武松	三坂耿一郎
野々村一男	小森邦夫	中村晋也
雨宮敬子	長江録弥	橋本堅太郎
雨宮 淳	川崎普照	蛭田二郎
能島征二	市村緑郎	山本眞輔
神戸峰男		

（順不同・敬称略・計31名）

日本の近代彫刻が築かれていく過程において、彫刻家オーギュスト・ロダンをはじめとするフランス近代の彫刻家たちから受けた影響は大きく、本会の礎を築いた多くの先達もフランスに憧れ、訪れ、学んでいます。

この度本会は、50周年記念事業特別展として、「日仏をつなぐ彫刻芸術の系譜―戦後の具象彫刻を牽引した彫

刻家たち―と題し、日本彫刻家連盟結成以後、現在の公益社団法人日本彫刻会に至るまで、日彫会を牽引されてきた歴代理事を中心とする彫刻家31名の彫刻作品を一堂に集め展示しました。

26日午後2時からのオープニングセレモニーは、新型コロナウイルス感染拡大対策として、限られた人数で行われました。前文化庁長官 宮田 亮平先生、公益財団法人日仏会館理事長 中島 厚志様、日本芸術院会員 黒田 賢一先生、佐藤 哲先生、高木 聖雨先生の各氏、武蔵野美術大学教授 黒川 弘毅先生、清水 多嘉示先生のご息女 青山 敏子様が、来賓としてご列席いただきました。また、会場内の密を避けるため、本会会員は、会場外のロビーにてスクリーンに映し出されたセレモニーを見る形式で行われました。

神戸峰男理事長よりこの展覧会に至った経緯などが説明され、その後来賓挨拶を宮田 亮平先生、中島 厚志様より、インターネットを通じて仕事をすることが多くなったが、実存の大切さ、日彫会50年の歴史への賛辞とともに、コロナ禍での開催の意義は大きいとお言葉を賜りました。

その後テープカットが行われ、展覧会が無事開催されました。オープニングには70名近い方が来場され、改めてこの展覧会の注目度の高さを感じました。

また午後4時より池川直理事の進行により、武蔵野美術大学教授 黒川 弘毅先生、清水 先生のご息女の青山 敏子様、神戸理事長によるトークセッションが行われました。次頁にその様子の一部を抜粋する形でご紹介させていただきます。



日仏会館での特別展の様子

トークセッション

日時 2021年6月26日(土) 16時〜17時

会場 日仏会館ギャラリー

参加者 日本彫刻会 理事長

神戸 峰男

清水多嘉示先生のご息女

青山 敏子

武蔵野美術大学教授

黒川 弘毅

進行役 日本彫刻会理事

池川 直

池川 本日は、日本彫刻会神戸峰男理事長、そして清水多嘉示先生のご息女青山敏子様、武蔵野美術大学教授の黒川弘毅先生にお集まりいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。さて、日本彫刻会は、社団法人化して昨年50周年を迎えました。まずは、神戸理事長からこの展覧会への想いをお話いただければと思います。

神戸 日本彫刻会は、発足以来50年、多くの会員により維持され発展してきました。とりわけ今回出品いただいた、30名の歴代理事長並びに指導者各位に敬意を表します。

近代日本の彫刻家たちは、ヨーロッパの強い流れを受けながらも各々が、東洋を、日本を意識し自立を目指す中で様々な団体ができ、集合、離散を重ねながらもそれぞれの主義主張を外に向けることで進化してきました。その後、50数年前に彫刻家たちが一堂に集まった勉強会創立が発案され、具象彫刻を合言葉に学校系、塾系、師範系、仏師系が大同して一つの団体ができ、50年間彫刻を勉強する集団として、またお互いに作品を競い合う場として続けてきました。その節目でこの様な展覧会が企画され、その先生方の作品を一堂に集めることができ

る機会が得られたことにあらためて感謝と共に感激しております。

池川 次に、黒川先生、戦後の彫刻の流れの中で、本日のテーマである清水多嘉示先生の生き様と申しましょるか、戦前フランスで勉強され、それを日本に持ち帰ってこられました。この日本彫刻会に影響を与えたことを、初めに少しお話いただければと思います。

黒川 今回の展覧会の作家の中で、フランスに留学し、フランスの作家のもとで研鑽を積んだ経歴を持つ点で、ブルデルの下で学んだ清水多嘉示が一番大きな存在だと思います。他にアペル・レ・フェノザのもとで学ばれた中村晋也ですね。フェノザは、グラン・ショームエールで清水先生の同級生としてブルデルに学んでいた。この展覧会の中だと、おそらくお二人がフランスと関わりが強いのではないかと思います。清水先生は、私が奉職している武蔵野美術大学の彫刻学科の基礎を築き、学校にご自分の生涯を捧げた先生です。ブルデルから学んだことを自分の教育の中でも実践しました。それは、単なるブルデルの模倣では無い。日本のロダニズムは表面的模倣が多いが、それとは全く違う。精神的なものを学び、いわゆる具象、人体塑造の基準を、日本において正統に築きあげようとした。それまでにあった日本の具象彫刻を、もっと深く掘り下げて、その基礎を築こうとした。そのことがブルデルから学んだことの意義であろうと感じております。この展覧会の中の清水先生の作品は、日本の具象彫刻の歴史を解釈する上で、大きな意義を持つと思っています。

神戸 日本の彫刻家たちは、明治以降に日本に入ってきたヨーロッパ彫刻を学ぶ中で、日本での彫刻をどの様に表現するか悩んでいたと思います。そこにいきなり「清

水多嘉示の彫刻観が出現」した。そのように感じたのではないのでしょうか。私は、清水先生の大学での最後の教え子の一人になります。清水先生の学生への接し方は、他の先生方とは少し違っていました。まず彫刻への入り口の違いを感じました。そう言う意味では、清水先生の存在は凄く大きいですね。

池川 本日は、清水先生のご息女の青山敏子さんにもお越しいただいております。武蔵野美術大学の美術館には、清水先生のコーナーがあると言うことで、後ほどご紹介いただきますけれども、お父様、清水先生はどのような方だったのでしょうか。

青山 私は彫刻を習ったことはありません。でもアトリエには、彫刻がいっぱいありましたし、制作中に入っても怒られないので、私は、小さい時は、すぐ傍で粘土でドーナツなんか作っていたんです。とても優しい父親でしたね。

池川 清水先生は、日本に帰国した後、ブルデルについて何かおっしゃられたことはありましたか。

青山 ブルデルが、当時病床に伏してしまって、父が友達から送ってもらった仏像をブルデルは、枕元に置いていて、「君はいつでも僕の部屋に入ってきて良いんだよ。」って言われていたそうです。

池川 その様な間柄だったんですね。さて、この『みどりのリズム』は、1951年の野外彫刻のコンペに日展作家が挑戦する初めての試みだと伺っています。

神戸 おっしゃるように日展作家がコンクールに応募したのは、きつと初めてだと思います。これをきっかけに、木下繁、三坂耿一郎など当時新鋭の作家たちが、清水先生のもとに集まった。これは大きな出来事だったと思います。このことがなければ、そう言った美校出のエリートが、清水先生のもとに集まらなかったと思います。

池川 この様な構造的と言いますか、バランスを考えながら躍動感があり、どこから見ても構成としてピタッとおさまっています。黒川先生もこのことについて論文の中で書かれておられますが、少しご説明いただければと思います。

黒川 清水先生は、組み立てと言うことを非常に重視します。彫刻の構造です。「彫刻は組み立てられたものだ」という考えをブルデルから学びます。その組み立て、いわゆるコンストラクションは、ここに展示されている『みどりのリズム』では、二つの人体が、一体で一つの組み立てを持つことを示しています。一つの人体の構造とは違う、二つの人体が、一つの構造、組み立てを持つことを、この作品は徹底的に追求している。全ての方向からデッサンしたものとして、清水先生は彫刻を作ろうとしました。まさしくそれが実践された作品だと思っています。

この作品が作られ最初に設置されたのは上野広小路に面した場所で、低い台座に載せられました。それまでの高い台座に載る威圧的な国家のプロパガンダの彫刻とは全く違った、親しみやすい高さの台座で設置された少女の群像は、新しい戦後の彫刻の方向性を示した彫刻です。それは上野広小路と言う設置場所を意識して作られたものです。このことはもつと評価され認識されるべきだと思います。1951年にこれがどの様な経緯で制作されたのか、元はどの場所に設置されていたのか、そういうことが何も表示されことなく現在の場所、上野公園の売店の裏に移設されているのは、本当に残念なことだと思います。

神戸 私が清水先生の下に何うようになったのは、大学に入った1963年からです。『みどりのリズム』完成から12年後となります。先生の古いアトリエが好きでしてね。

ストーブがあつて、犬がいて、沢山の油絵に囲まれてね。そこに先生がいらつしやる。その姿は何か特別な絵を見ているような気持ちになりましたね。

池川 清水先生がパリに行かれる目的として画家になると言うことで渡欧されましたが、ブルデルに出会い彫刻に目覚めたということですが。

黒川 清水先生は、1923年にパリに行つて、そしてお帰りになつたのが1928年です。その期間ブルデルの教室に在籍した学生たちの中にジャコメッティ、リッシエがいました。フェノザもその一人です。彼らは、戦後彫刻を牽引していく存在です。他にもマリーニも短期間在籍しました。ロシアやギリシヤ、あるいは北欧からも来ていた。エール・ド・パリの時期です。

三坂耿一郎、木下繁においては清水先生の影響が大きい。日展あるいは日彫会の中で、清水先生はリーダー的存在として見られていたと思います。清水先生は、もともと教育者としての資質が高い。パリ留学前は諏訪で代用教員をしながら二科展に絵が入選しており、教員としてもかなり根性がある人だと思っています。清水先生はブルデルから教育と彫刻を学び、日本に帰つて教育者として周りを变えていく。帝国美術学校、そして武蔵野美術大学と非常に長い期間教員として務めるけれど、学校の教育以外でも周りの人たちに影響を与えていく。それはまさしくブルデルから得たものをみんなに伝えたかったからだと思っています。

池川 長野県は、教育熱心な土地柄と言うこともあり、そう言う中で芸術に関わる人たちも多く輩出されています。

黒川 明治末から大正にかけての長野の教育環境はものすごく先進的だったと思います。例えば、諏訪郡の教育の中心になった諏訪郡視学に島木赤彦がいて、アララギ

派歌人の土屋文明が呼ばれて校長になつた時期の諏訪高等女学校で、清水は美術教員をしています。清水が学んだ諏訪中学校の教員には西岡瑞穂がいました。当時、白樺派は展覧会、講演会を信濃教育会と一緒にやってやっていた。そう言う時期に清水先生は、青春時代を過ごしています。そしてそのままパリに行く。その環境はブルデルのもとでもつと発展したと思います。

神戸 荻原守衛、石井鶴三、矢崎虎夫、中村直人、などあの地域から多くの彫刻家が生まれてきました。清水先生と直接的な関係は無かつたとしても一つの核になつたことは確かですね。

青山 とつても忙しかつたんですね、父は教員として武蔵美だけじゃなくて、早稲田の建築科にもずっと行つていたし、それから自由学園にも行つていました。それは、羽仁もと子さんたちが、自分たち夫婦は音楽や美術のことは駄目だけれども、一流の人を講師に頼みたいと言われて、サイトウキネンの齋藤秀雄先生が音楽で来られていて、有名な指揮者の小澤征爾さんが当時抱持ちで来ていて、齋藤先生は気に入らないとタクトが飛んできたわ。なんて昔の女学生、今はご高齢ですけども、そう言う風にお話してくださいて面白かったです。

神戸 先生が自由学園にも教えに行つてらした。その後木下繁先生、それから橋本次郎先生、橋本堅太郎先生等、皆さん清水先生からの紹介でいらつしやつた。そう言う意味では、自分だけで抱えてしまふと言うことをしなかつた先生ですよ。

池川 人が次の人に伝えていくと言うのは、なかなかこれが上手いきません。そう言う意味で、清水先生を通じて、次の代の三坂先生、木下先生のお名前も出ました。日彫会がこれから先に進んで行くにはどうするべ

きか、若い人たちに何か伝えたいことがございましたらお願いします。

神戸 清水先生が日本へ帰らないといけなくなつたとブルデルに相談した時に、ブルデルは、「帰つて、日本の風土に学べ。日本には素晴らしい彫刻が、文化がある。」これは私が東京から都落ちする時に清水先生が、ブルデルから聞いた言葉を君に贈るよとおつしやつて、「君は東京から美濃の田舎に帰るんだけれども、そこにはその地域の風土や文化があるからそこから学びなさい。」とおつしやつたんですね。それを頼りに私はその後50年余り生きておりますので、そう言う意味からしても、「大切なものは何だろうか。」と言うこと。それから常におつしやつていたもう一つの話は、「感情が形を作るんじゃない。形が感情を作るんだ。」「彫刻家は、形で表現する。」とあの寡黙な先生が、口が酸っぱくなるほどおつしやつていた。

池川 黒川先生はいかがでしょう。

黒川 清水先生がずいぶんその後の若手に影響を与えていると思います。この中では三坂先生、それから木下先生もそうですね。その辺りに対しては強い影響を持っていたらと思います。ただ、清水先生の教え方では、自分の様式的なもの、作り方を押し付けることはなかった。だから、それぞれの人がそれぞれの展開を遂げていると思います。それは清水先生の教育の特筆すべき点だろうと思います。それはまた、ブルデルから受けた考え方だろうとも思います。弟子が先生の様式を受け継ぐことを許さなかつたし、そういう教育をしなかつた。お弟子さんたちは、清水先生の薫陶を受けたが、様式的にまねはしない。一人ひとりがそれぞれ自分の特質を伸ばすために、その種を植え付けても、それは先生の真似

をすることではない。それが清水先生の教育の中では非常に重要であつたと私は感じています。

池川 清水先生は、帰国後、帝国美術学校で吉田三郎先生の下で助教授をされたと聞いております。その後吉田先生は、武蔵美から多摩美に移られて、それから東京高等師範学校で教えられた。のちの東京教育大であり、つまりは、中村晋也先生の、それから繋がっていく山本眞輔先生、市村録郎先生の系譜ですね。フェノザの教えで、「彫刻は詩でなければならぬ。」ブルデルの言葉にも、何かそういったものを感じますよね。彫刻のなかに自らの内面的な心情を表現することでしょうか。清水先生と他の会派の彫刻家との関係はどうでしたか。

黒川 清水先生は、「彫刻とは何か」ということに関する影響を与えた。でも、それは自分の党派や派閥を作ろうというものでは無かつたと思います。

神戸 そう、その純粋な彫刻への思いからつまりね、それとは違つた形で勉強会を作つたんです。毎月二十日に先生のアトリエに集まつていました。その時代はみんな貧乏してしまつてね。先生のところへ行けば何かおいしいものが食べられる。

青山 いつのころからありましたね。その時代そんなようなことで、皆さんが集まると色々お出ししてましたね。

神戸 清水先生は、酒は一滴も飲まれないのに、ちゃんと我々には酒を用意してくださつていましたね。又、旅に同行した時などの費用も先生が出して下さつていましたね。

池川 そろそろまとめに入りたいと思います。日本彫刻会は、具象彫刻の研究団体として、これから色々やらなければいけないことがあると思いますが、清水先生は作家に対するアドバイスであるとか、フランスの作家を

紹介すると言つてことをされましたね。清水先生自身が育てられた方たちもいらつしやいますし、間接的に影響を受けた方もいらつしやいます。このことを若い人たちにどう繋げていくのかと言つてことが私たちの課題だと思ひますが、青山さんはいかがでしょう。

青山 そうですね、父は自分から何かを押し付けようとか、多分美術学校でもそうだったと思うんですけど、そう言うところは無くて、でも、いつでもみんなのことを思つていた事は確かなんですよ。優しい人でしたね。怒るつてことはあんまりなかつたんですね。

神戸 私には厳しい先生でしたけれどね。

池川 黒川先生、具象彫刻、日彫会はこれからどう言う進め方が考えられるでしょうか。

黒川 具象、抽象というようなカテゴリーはそんなに重要ではなくなるような気がします。でも、彫刻は基本的に「人間とは何か」ということを問題にしていいて、人間の形をどう作るかをずっとやつてきています。人間の形をしてなくても人間が問題になつてはいます。でも具体的に、人間の形を再現的にどう作るかという問題は無くならないと思います。日彫会の中でそれがどう展開していくかに関しては、私には分かりませんが、「人間とは何か」というこのテーマこそがまさしく彫刻の根本的問題であるので、それだけは無くならないでしょう。日彫会がどれだけの広がりを持つて、これからの若い世代に対して影響を与え、そして若い世代がその中に参加してくるか、そこで日彫会がこの普遍的なテーマの中で、どう活動していくのか。それは私も楽しみです。

池川 本日はどうも有難うございました。

トークセッション映像、日彫会HP公開予定。

◇50周年記念事業

日本彫刻会選抜展

― 掌中の美 ―

会期 2021年6月1日(火)～6月7日(月)
会場 日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

(東京都中央区日本橋室町1-4-1)

日本橋三越本店で定期開催している「日本彫刻会選抜展」ですが、本来ならば50周年記念事業として華やかに開催されるはずであった昨年は、新型コロナウイルス感染拡大によって中止となりました。今年も外出自粛の制限された状況ではありますが、今年も外展でき、46名の会員による心のこもった小品を集めた展示となりました。



日本橋三越本店6階美術特選画廊

緊急事態宣言中ということもあり、画廊の来客数は例年より少なかったですが、このような時でも来場される方がいることは大変ありがたいことで、会員一同にとっても今後の制作の励みとなるものと思います。芸術が不要不急の対象ではなく、人々に寄り添うものであると信じ、来年に向けて再び歩き始めなければなりません。1日でも早くこの現状を脱して、平穏な日々になりますことを切に願うばかりです。

以下、やむなくご来場を控えられた多くの方に向けて、会場の様子を掲載いたします。図録からは伝わらない展示の雰囲気、少しでも味わって頂ければ幸いです。

出品作家(46名)

神戸峰男	橋本堅太郎(遺)
川崎普照	蛭田二郎
山本眞輔	山田朝彦
石黒光二	笹山幸徳
石崎義弘	石田陽介
上田久利	江里敏明
親松英治	勝野眞言
木代喜司	九後稔
熊谷貴美子	齋藤尤鶴
白石隆幸	田中厚好
田丸稔	堤直美
中原篤徳	中村優子
一鉄田徹	廣川政和
槇野仁一	間島博徳
安田陽子	山崎茂樹
吉居寛子	吉岡徹
	山下清
	能島征二
	池川直
	青山三郎
	伊庭靖二
	小関良太
	川崎義昭
	工藤潔
	櫻井真理
	谷口淳一
	寺山三佳
	早川高師
	堀内有子
	宮坂慎司



◇第13回日本彫刻会

新鋭選抜・受賞作家展

2021年5月23日(日)～6月5日(土)まで、銀座のギャラリー青羅にて「第13回日本彫刻会 新鋭選抜・受賞作家展」が開催されました。

奇しくも緊急事態宣言下の開催となりましたが、本展覧会の方、ギャラリー青羅のご厚意により、当初開催予定であった30日から1週間会期を前倒しして5月23日からオープン、2週間ギャラリーをお貸し頂き、開催することができました。

過去最多の28名の作家による作品が出品され、素材は石膏、樹脂、陶、木、テラコッタ、ブロンズ、鉄、石、漆など多岐に渡り、表現内容もバラエティーに富んだ作品が陳列されました。



「作品を語る会」の様子

最終日には、来場された方も交えて「作品を語る会」が行われ、神戸峰男理事長と山田朝彦委員長にもご出席頂きました。

13時より開催された同企画でしたが、準備委員の橋本拓也委員の司会のもと、出品者より作品の意図や制作の苦労話などが語られ、神戸理事長より講評を頂くかたちで進められました。

神戸理事長からは、先に東京都美術館で行われていた「第50回記念 日本彫刻会展覧会」が、緊急事態宣言の発令により、会期半ばにして中止を余儀なくされたことも踏まえ、このような状況下においても展覧会を開催できたことについて労いの言葉を頂きました。また作品講評では、博識に基づくアドバイスをそれぞれ頂き、出品者にとつて、今後に繋がる示唆に富んだ講評会となりました。

会期中は緊急事態宣言の影響により、ギャラリー周辺は閉店中の飲食店が多く、いつもなら昼食時には、銀座界隈で働く人々が道に溢れるギャラリー周辺も、閑散とした様相を呈していました。そのため、例年ほどの来場者数には達しませんでした。それでも、何人かの熱心な彫刻ファンの方や、通からギャラリーをご覧になって、入場頂いた方々に作品を観覧して頂くこともありました。また、何点かの作品は、来場された方より購入を希望される話も挙がるなど、展覧会を開催することによってできる一期一会の大切さを、改めて感じさせられる展覧会でした。



秋田 美鈴「Round cushion」



市村 成保「注ぐ」



上田 ふみ
「赤いショール」



加藤 真浩
「#24(maquette)」



鈴木 紹陶武
「塔の上のシンガプーラ」



重政 信明「わがままなわたし」



柴田 茜「お昼寝」



宮本 温子「蕾」



窪 信一郎「少年のように」



田村 晴江「裸婦（習作）」



田中 宏欣「おれんじ雲」



境野 里香
「しあわせな刻」



東 耕平「記憶の記憶」



井上 周一郎「白昼夢」



近藤 哲夫「不屈」



森 矢真人「星空」



城谷 なるみ
「父、令和三年
- 診療所の待合室 -」



菊川 敏「瞳を閉じて」



松井 みどり
「スペラトス（希望）の風」



長谷川 倫子「竜宮」



山内 雄奨「丘物語」



三政 洋一「悠々閑々」



武本 大志「招き猫又」



高橋 忠「文香旅立ちの日」



志村 広子「波音」



古井 光二
「国引きの神（出雲）」



白石 恵里「霧の街0」



橋本 拓也
「the path to go（進むべき道）」

「彫刻研究誌 アートライブラリー」

(Japanese Journal of Sculpture) 発行

2000年に創刊されたアートライブラリーは、これまで古典から現代彫刻まで様々な彫刻芸術について、幅広く執筆者の先生方にご協力をいただき、この文化の奥深さについて紹介し、その公益社団法人としての責務を果たしてまいりました。

発刊から20年を経た2020年4月におきましては、発刊実績は21号に及んでいます。同時に日彫会としては50周年を迎え、今年2021年、アートライブラリーは、これまでの活動を継承しつつ、さらに国内では希少な彫刻研究誌としての専門性をさらに広げ、且つ深めてゆくために、「彫刻研究誌 アートライブラリー (Japanese Journal of Sculpture)」として、論文投稿を募集することとなりました。

2021年7月現在、投稿論文6本の受付を終え、選定された査読委員各位による厳正な査読作業を経て、最終的な編集の準備に入っています。

6本の論文はいずれも気鋭の制作者、研究者からの意欲的なものでしたが、今回の結果が今後の質的基準となることを念頭に、掲載論文の選定にあたっては、慎重に議論を重ねられ、論文から研究ノートへの見直し、または推敲を求める等、内容の更なる充実が図られています。

第1回の投稿論文に関する査読・編集作業の後は、第2回の投稿受付を予定しています。

彫刻研究誌 アートライブラリー (Japanese Journal of Sculpture)

「Journal of Sculpture」としましては、日彫会会員や日彫展への出品者のみならず、他の団体を含め、広く彫刻の制作者及び研究者からの応募を期待しております。美学や美術史的視点からのみではなく、制作者目線の技法論や、彫刻観、制作観に関するテキストの希少な受け皿として、この研究誌が確立してゆくことを目指しています。

◆第1回投稿

2021年3月7日(日) 締め切り

投稿論文6本受付

2021年3月～5月

第1回投稿分審査

2021年5月～8月

見直し・推敲・2次審査(予定)

2021年

発行予定

◆第2回投稿受付

2021年9月30日(木) 17時迄

※投稿規定等詳細については、日彫会ホームページ下段(下)よりご確認ください。

第50回記念 日本彫刻会展覧会
NICCHOUTEN EXHIBITION

東京都美術館 ギャラリーA・B・C
2021年4月18日(日)～5月2日(日) (4月19日(月) 休館日)
＜高校生及び学生の出品料無料＞

→ 第50回展 終了いたしました

ART LIBRARY
論文投稿案内
展覧会関係
日彫会報

※日本彫刻会 TOP ページ
<https://www.niccho.com/>
<https://www.niccho.com/al/>

追悼 橋本堅太郎先生を偲んで

神戸峰男

本年1月31日、橋本堅太郎先生は、幽明境を異にされました。享年90歳という御歳ではありませんでしたが、まだまだ本会でご活躍頂き、私たちをお導き下さると思っておりましたのに、ご逝去の報に接し、ただただ虚しく、失ったものの大きさに悲しみを新たにしております。

橋本先生が、彫刻家として偉大な業績を残されたことは言を俟ちません。先生は、彫刻家・橋本高昇先生のご長男として生まれ、東京藝術大学の平櫛田中教室に学ばれました。正統的な木彫による確固とした具象表現で彫刻家としての地位を不動のものとされましたが、それだけでなく、いつも実験的な構成や、異素材との組み合わせに挑戦され、その若々しく生命感が横溢した作品に驚かされたのは私だけではないでしょう。数々の木彫、塑造の作品を本会や日展を中心に発表され、その功績により日本藝術院会員に就任、文化功労者として、我が国の彫刻界を力強く牽引されました。また、教育界においても東京学芸大学教授として彫刻教育に携わられ、多くの優れた人材を輩出されました。

先生は、平成8年に日本彫刻会理事、委員長を歴任され、平成12年から理事長として2年間、お務めになられました。在任中は、視覚に障がいのある方を対象とした彫刻鑑賞事業の本格化など様々な改革に着手され、現在の本会の原型を作り上げられるなど、多大なる貢献をして頂きました。

私たちはもはや先生のご温顔を拝することは叶いませんが、先生が大切にされてきた本会を、会員、会友、一般の鑑賞者の皆さまと共に発展させていくことが、先生のご恩に報いることだと考えております。

橋本堅太郎先生のご遺徳を偲ぶには充分言葉を尽くすことができませんでしたが、ここにあらためて感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の誠を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。



「流転」1990

合掌

◇『日本彫刻会史Ⅱ(2001-2021)』 に関する進捗状況

50周年記念事業の一つとして、20年間の記録を網羅した『日本彫刻会史Ⅱ(2001-2021)』(約300-500頁、300部発行予定)の編集を進めています。委員長 山田朝彦先生、担当理事の池川直先生をはじめとして、五十周年記念事業委員18名の先生方を中心に、事務所から資料や画像等の提供をいただきながら、各委員で分担した原稿の執筆、データの集約と整理、印刷会社(コーポ株式会社)との調整を行い、現在は第一次原稿ゲラの校正・修正及び第二次原稿の作成を行なっている段階です。当初、2020年末の発行を予定していましたが、50回記念展が2021年に開催されたことにより、この記念誌の発行も延期されています。主な進捗状況は、次の通りです。

◆記念誌の基本方針

◇第1回50周年記念展実行委員会(於…日本彫刻会事務所 2019年3月)

・ 本会の歴史を様々な角度から取材しまとめ、記録としての記念誌を目指す。
・ 30周年記念誌以降、20年間の日彫展の開催概要をまとめ。

・ 記念誌の体裁は、30周年記念誌に準ずるものとする。

◆記念誌の内容(案)

◇臨時理事会報告(2019年6月)

- ・ 表紙、序文、目次
- ・ 『日本彫刻会史Ⅱ』の刊行にあたって
- ・ 目でみる日彫会の歴史
- ・ 役員紹介
- ・ 第50回記念日彫展にあたって
- ・ 日本彫刻会史(2001-2021)

・ 東海日彫会、北陸日彫会、関西での活動
・ 日彫会の企画及び主催事業
・ 会報及びアートライブラリー

・ 日彫展出品総目録

・ 役員・審査員・受賞者・委員一覧

・ 『日本彫刻会史Ⅱ』発刊の経緯

・ 50周年記念特別展ほか(検討中)

・ あとがき、謝辞、奥付、裏表紙ほか

◆ 執筆要領を各担当者・連絡(2019年8月)

◆ 原稿執筆(2019年9月-2020年1月)

◆ 編集会議(於…日本彫刻会事務所 2020年2月)

◆ 第1次原稿入稿(2020年3月)

◆ 第1次原稿ゲラ受領(2020年4月)

◆ 原稿「日本彫刻会50周年にあたって」(守屋正彦先生
(現・山梨県立博物館館長)受領(2020年12月)

◆ 第2次原稿執筆要領の連絡(2021年1月)

◆ 第1次原稿ゲラ校正(2021年4月)

◆ 第1次原稿ゲラ修正(2021年6月)

◆ 第2次原稿執筆(2021年7月)

以降、第二次原稿入稿・校正、印刷・製本、納品・
発送の順で作業を進める予定です。

計 報

左記の方が長逝されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

正会員	菱田 恭子 先生	令和2年10月
常務理事	橋本 堅太郎 先生	令和3年1月
正会員	木内 孝資 先生	令和3年3月
正会員	岡本 昭 先生	令和3年6月
正会員	石田 康夫 先生	令和3年8月
正会員	齋藤 二郎 先生	令和3年9月

編 集 後 記

◆ 昨年は、新型コロナウイルスの影響で、本会の主催する展覧会がすべて延期となり、会員の皆様落胆されたことと思います。しかし、今年は感染拡大防止に留意した上で、記念すべき第50回展を開催することができました。何分天災ですので、予定通りではありませんでしたが、理事や会務委員の方々を含め、会員皆さま、関係各位のご尽力のおかげで、成功裏に終えることができたことより感謝申し上げます。

◆ 今年も、懇親会や彫刻研究会など、会員相互が作品や彫刻観などについて語り、切磋琢磨する場は設ける事ができず、紙面にその様子の記事がないことが残念です。早く新たな形でも、日常を取り戻せる日を、切に願うばかりです。

◆ 50周年を迎えた本会は、古き良きものは継承しつつ、常に社会の流れに対応するための積極的な改革にも取り組んできました。最近では、賞の新設や改編彫刻研究誌アートライブラリーの発行などが挙げられます。本会報が、会員の皆さまへの周知と、さらなる協創の一助となれば幸いです。

表紙写真提供

相澤 實氏

橋本堅太郎先生肖像写真提供

平間 至氏

出版・広報委員

堀内秀雄 一畝田徹 田丸稔
高野眞吾 鈴木紹陶武
永江智尚 三政洋一

日彫会報 No.80

令和3年9月8日発行